

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-07-28

## 民法総則編基礎法条

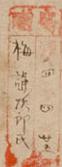
---

(発行年 / Year)

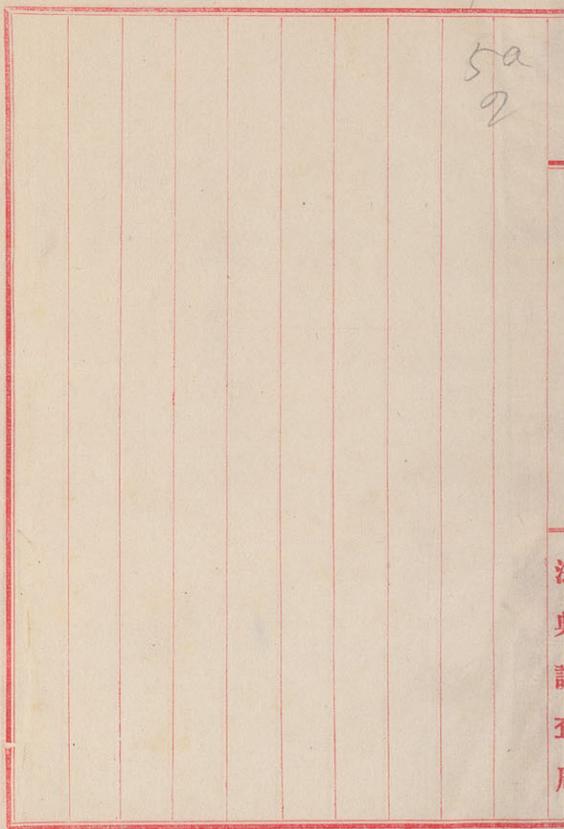
1910



民法總則編基礎法條



A  
5a  
2



法身請至月

11982

民法

第一編

第一章 人

第一節 權利ノ享有

(人事編)

第一條

凡ソ人ハ私權ヲ享有シ法律ニ定メタル無能力者ニ非サル限リハ自ラ其私權ヲ行使スルコトヲ得

第二條

胎内ノ子ト雖モ其利益ヲ保護スルニ付ラハ既ニ生マレタル者ト看做ス

第四條

外國人ハ法律又ハ條約ニ禁止アルモノヲ除ク外私權ヲ享有ス

第二節 能力

法典調査會

(人事編)

第一條

凡ソ人ハ私權ヲ享有シ法律ニ定メタル無能力者ニ非サル限リハ自ラ其私權ヲ行使スルコトヲ得

第三條

私權ノ行使ニ関スル成年ハ滿二十  
年トス但法律ニ特別ノ規定アルトキハ此  
限ニ在ラス

第六十八條

婦ハ夫ノ許可ヲ得ルニ非サル  
ハ贈与ヲ爲シ之ヲ受諾シ不動産ヲ讓渡シ  
之ヲ擔保ニ供シ借財ヲ爲シ債權ヲ讓渡シ  
之ヲ質入シ元本ヲ領収シ保證ヲ約シ及ヒ  
身体ニ羈絆ヲ受クル約束ヲ爲スコトヲ得  
ス又和解ヲ爲シ仲裁ヲ受ケ及ヒ訴訟ヲ起

スコトヲ得ス

第二百十八條 自治産、未成年者、保佐人、立會アルニ非サレハ元本ヲ領収スルコトヲ得ス

第二百十九條 第九十四條ニ掲ケタル行爲ニ付テハ自治産、未成年者ハ保佐人、立會アルニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス  
第二百二十二條 心神喪失ノ常況ニ在ル者ハ時時本心ニ復スルコト有ルニ其治産ヲ禁スルコトヲ得

第二百二十三條 自治産ハ配偶者、四親等内ノ親族、家主及ヒ檢事ヨリ之ヲ區裁判所ニ請求スルコトヲ得

法典調査會

自治産ヲ請求スル權利ヲ有スル一人、申立ニ因リテ言渡シタル裁判ハ總テノ又ニ對シテ既判力ヲ有ス

第二百二十四條 自治産者ハ之ヲ後見ニ付ス

配偶者ハ当然相互ニ後見人ト爲ル若シ配偶者アラサルトキハ其家ノ父後見人ト爲リ父アラサルトキハ親權ヲ行フコトヲ得ヘキ母後見人ト爲ル

父又ハ母ハ第百六十五條ニ定メタル方式ニ從ヒテ後見人ヲ指定スルコトヲ得若シ指定セザリシトキハ第百六十六條ノ規定ヲ適用ス

法律ニ、後見人ニ遺言後見人ニ有ラス又ハ此等ノ後見人カ免除セラレ陣休セラレ差クハ罷黜セラレタルトキハ第十條ニ定メタル方式ニ從ヒ親族會ニ於テ後見人ヲ選定ス

第百三十條 禁治産者ハ禁治産ノ裁判言渡、日ヨリ無能力者トシ裁判言渡後ニ爲レタル禁治産者ノ行爲ハ之ヲ銷除スルコトヲ得

禁治産ノ裁判言渡前ニ爲レタル禁治産者ノ行爲ニ對シテモ其行爲ノ當時ニ於テ喪心、明確ナルトキハ銷除訴權ヲ行フコトヲ得

法典調査會

第百三十一條 禁治産ノ原因止ミタルトキハ本人、配偶者、親族、姻族、戸主、後見人又ハ檢事、請求ニ因リテ其禁ヲ解ク可シ  
禁治産者ハ解禁ノ裁判言渡後ニ非サレハ其權利ヲ回復スルコトヲ得ス

第百三十二條 心神耗弱者、聾啞者、盲者及ヒ浪費者ハ唯禁治産者ト爲レテ之ニ保佐ヲ付スルコトヲ得

唯禁治産ノ言渡ハ配偶者、三親等内ノ親族及ヒ戸主ノ請求ニ因リ區裁判所之ヲ爲シ保佐人ニ付テハ第百二十四條及ヒ第百二十五條ノ規定ヲ適用ス

第百三十三條 第百十七條乃至第百

二十條ノ規定ハ之ヲ准禁治産ニ適用ス  
裁判所ハ狀況ニ從ヒテ保佐人ノ立會アル  
ニ非カレハ管理行為ヲモテ爲スコトヲ得サ  
ル旨ヲ言渡スコトヲ得

第百三十五條 准禁治産ノ原因止ミタル  
トキハ本人、配偶者、親族、姻族、戸主、保佐人又  
ハ榎事ノ請求ニ因リテ其禁ヲ解ク可シ

第百三十六條 刑事上禁治産ヲ受ケタル  
者ハ其財産ヲ管理スルコトヲ得ス又遺言  
ヲ以テスル外ハ其財産ヲ處分スルコトヲ  
得ス

第百三十七條 刑事上禁治産者ニハ後見  
人ヲ付シテ其財産ヲ管理セシム此後見人  
ノ指定及ヒ管理ノ方法ニ付テハ民事上禁  
治産者ノ後見ニ係ル規定ヲ適用ス

法典調査會

第百二十九條ノ場合ニ於テハ禁治産者□  
ノ同意ヲ得ルヲ以テ足ル

第百三十八條 禁治産ヲ受ケサル瘋癲者  
アルトキハ配偶者、親族、戸主及ヒ榎事ハ區  
裁判所ノ許可ヲ得テ特別法ニ定ムル手續  
ニ從ヒテ之ヲ瘋癲病院ニ入レ又ハ自宅ニ監  
置スルコトヲ得

此場合ニ於テハ裁判所ハ直テ、仅管理人  
ヲ指定ス

第百三十九條 瘋癲病院ニ入り又ハ自宅  
ニ監置セラレタル者ハ入院中又ハ監置中

其財産ノ管理シ及ヒ処分スルコトヲ得ス  
第百四十條 仮管理人ハ痲癩者ノ總テノ  
行為ニ付テ之ヲ代表シ禁産者ノ後見人  
ト同視セラル但必要ナル行為ニ非カレハ  
之ヲ為スコトヲ得ス

第百四十二條 痲癩者ノ無能者ハ區裁判  
所カ仮管理ヲ解クニ因リテ止ム

財産編

第五百五十五條 高業又ハ工業ヲ管ムノ許  
ヲ得タル自給産ノ未成年者ハ其管業ニ関  
スル行為ニ付テハ之ヲ成年者ト看做ス  
然レモ其未成年者ハ普通法ニ從フニ非サ  
レハ不動産ヲ讓渡スコトヲ得ス

法典調査會

高法

第十條 契約ニ因リ獨立シテ義務ヲ負フコ  
トヲ得ル各人ハ一時ノ高取引ナルト常時  
ノ高業ナルトソ問ハス然テ高ヲ為スコト  
ヲ得

獨立シテ義務ヲ負フコトヲ得サル者ト雖  
モ其後見人ニ依リ亦高ヲ為スコトヲ得但  
後見人ハ高業登記簿ニ其登記ヲ受ク可シ  
第十一條 男女ソ問ハス未成年者ニシテ年  
齡十八歳ニ滿テ且父母又ハ後見人ノ承諾  
ヲ得テ獨立ノ生計ヲ立ツル者ハ高ヲ為ス

コトヲ得

右ノ未成年者自己ノ爲メ高ヲ爲サレト欲  
スルトキハ最項ノ要件ヲ明記シ且自己及  
ビ父母又ハ後見人ノ署名捺印シタル陳述  
書ヲ管轄裁判所ニ差出し登記ヨ受テ可シ  
然ルトキハ其登記ノ日ヨリ高事ニ於テ總  
テノ權利及ビ義務ニ関シ成年者ト全ク同  
一ナルモノトス

第十二條 婦ハ其夫ノ明示又ハ黙示ノ承諾  
ヲ得テ高ヲ爲スコトヲ得此承諾ハ其婦カ  
夫ニ遺棄セラルレ又ハ夫ヨリ必要ノ給養ヲ  
受テサルトキハ之ヲ得ルコトヲ要セズ  
婦カ其夫ノ高業ヲ助ケルノミニテハ之ヲ

法典調査會

商人ト着做サス

第十三條 高ヲ爲スコトヲ得ル婦ハ高事ニ  
於テハ獨立人ノ總テノ權利ヲ得義務ヲ負  
フ  
婦ハ高ノ債務ニ付テハ婦ノ財産ニ對シテ  
夫ニ屬スル管理權又ハ其他ノ權利ヤルニ  
拘ハラズ自己ノ全財産ヲ以テ其責任ヲ負  
フ但夫ノ承諾ヲ得テ高ヲ爲ス場合ニ於テ  
夫婦間ニ財産共通ノ存スルトキハ共通財  
産ニ亦其責任ヲ負フ

第三節 住所

(人事編)

第二百六十二條 民法上ノ住所ハ本籍地ニ

在ルモノトス

第二百六十三條 戶主ハ本籍ヲ移ス地ノ身

分取扱吏ニ申述シテ住所ヲ變更スルコトヲ得

未成年者又ハ民事上禁治産者タル戶主ノ住所ハ親族會ノ許可ヲ得テ後見人之ヲ變更スルコトヲ得

第二百六十四條 家族カ獨立シテ一家ヲ成

ストキハ本籍ヲ定ムル地ノ身分取扱吏ニ

其意思ヲ申述シテ住所ヲ設定スルコトヲ

得

法典調査會

一家新立ノ未成年者ニ付テハ後見人住所ヲ設定ス可シ

第二百六十五條 外國人始メテ日本ニ住所

ヲ定ムルトキハ其意思並ニ本國氏名及ヒ

出生年月日ヲ其地ノ身分取扱吏ニ申述シ家

族アルトキハ其氏名及ヒ出生年月日ヲモ

申述ス可シ

第二百六十六條 本籍地カ生計ノ主要タル

地ト異ナルトキハ主要地ヲ以テ住所ト爲ス

第二百六十七條 左ノ場合ニ於テハ居所ヲ

以テ住所ニ代用ス

第一 住所ノ知レサルトキ

第二 日本ニ住所ヲ定メサル外國人ニ  
關スルトキ

第二百六十八條 何人トモ或ル行為又ハ  
事務ノ為メニ假住所ヲ選定スルコトヲ得  
但此選定ハ書面ヲ以テスルコトヲ要ス

第四節 失踪

(人事編)

第二百六十九條 住所及ヒ居所ヨリ亡失シ  
又ハ音信絶エテ生死分明ナラサル人ハ之  
ヲ失踪者ト推定ス

此推定ノ裁判ハ本人ノ住所ノ區裁判所之  
ヲ為ス

第二百七十條 失踪ノ推定ヲ受ケタル者カ

法典調査會

総理代理人ヲ定置キタルトキハ其代理人  
ハ失踪ノ推定中本人ノ財産ヲ管理ス但必  
要アルトキハ裁判所ハ現實ノ利益ヲ有ス  
ル關係人推定相續人又ハ檢事ノ請求ニ因  
リテ代理人ノ解任ヲ言渡シ又ハ其後任ヲ  
指定スルコトヲ得

第二百七十一條 失踪ノ推定ヲ受ケタル者  
カ総理代理人ヲ定置カサリシトキハ裁判  
所ハ前條ニ掲ケタル者ノ請求ニ因リテ管  
理人ヲ指定ス  
此管理人ニハ成ル可ク推定相續人ヲ指定  
スルコトヲ要ス

第二百七十二條 代理人又ハ管理人ハ管理

行爲ヲ爲ス權限ノミヲ有ス他ノ行爲ニ付テハ必要ノ場合ニ依リ裁判所ノ許可ヲ得テ之ヲ爲スコトヲ得

代理人又ハ管理人ハ本人ノ利益ニ關係スル目録調製計算及ヒ稽算ニ付テ本人ヲ代表ス

第二百七十三條

管理人ハ失踪者ノ動産及ヒ證書ノ目録ヲ調製ス可シ又不動産ノ形狀ヲ確定セシムル爲メ鑑定人ノ選定ヲ裁判所ニ請求スルコトヲ得鑑定人ノ報告書ハ裁判所ノ認可ニ付スルコトヲ要ス此等ノ手續ノ費用ハ本人ノ財産ヲ以テ之ヲ支辨ス  
關係人推定相續人又ハ檢察ノ請求アルトキハ本條ノ規定ヲ代理人ニ適用スルコトヲ得

法典調査會

第二百七十四條

代理人又ハ管理人ハ推定相續人ヲ除ク外其請求ニ因リテ裁判所ノ定メタル給料ヲ受ク裁判所ハ管理及ヒ財産返還ノ擔保トシテ保証人其他相當ノ擔保ヲ立テシムルコトヲ得

第二百七十五條

代理人又ハ管理人ハ失踪者ノ子孫ノ教育婚姻又ハ營業ノ爲メ資財ヲ與フルニ付テハ區裁判所ノ許可ヲ受クルコトヲ要ス

第二百七十六條

失踪者カ代理人ヲ定置キテカリシトキハ五年又代理人ヲ定置キテ

ルトキハ任期ノ長短ヲ問ハス七ヶ年ニ至  
ル其生死ノ音信ヲ得サルニ於テハ失踪者  
ノ死亡ニ因リテ発生スル權利ヲ其財産上  
ニ有スル者ハ失踪者ノ住所ノ區裁判所ニ  
失踪ノ宣言ヲ請求スルコトヲ得

第百七十七條 右請求ノ訴ス可キモノ十  
ルトキハ裁判所ハ失踪者ノ住所及ヒ其最  
後ノ居所ノ地ニ於テ證人訊問ヲ爲ス可キ  
コトヲ命ス可シ此證人訊問ニ付テハ民事  
訴訟法ニ定メタル忌避ノ規則ヲ適用セス  
第百七十八條 證人訊問ヲ命スル決定ハ  
裁判所ノ指示板ニ指示シ且官報又ハ公報  
ニ掲載シテ之ヲ公示ス可シ

法典調査會

第百七十九條 失踪宣言ノ裁判ハ證人訊  
問ヲ命ジタル決定ヨリ一个年ノ後ニ非サ  
レハ之ヲ宣言スルコトヲ得ス  
此裁判ハ前條ノ手續ニ從ヒテ之ヲ公示ス  
可シ

第百八十條 失踪宣言ノ裁判アリタルト  
キハ失踪者ノ遺言書ハ關係人推定相續人  
又ハ檢事ノ請求ニ因リテ之ヲ開封ス可シ  
失踪者ノ死亡又ハ最後音信ノ日ニ於ケル  
推定相續人其他失踪者ノ死亡ニ因リテ発  
生スル權利ヲ其財産上ニ有スル者ハ直ニ  
ニ其財産ヲ占有スルコトヲ得

第百八十一條 失踪者ノ屬スル財産ノ右

右ニ付テハ總テ相續ニ關スル規定ヲ適用ス

此占有ヲ得タル者ハ第三者ニ對シテハ財產ノ所有者トス

然レトモ占有者ハ推定相續人ヲ除ク外財產及還ノ担保トシテ裁判所ヨリ相續ト認ム

ル保証人其他ノ担保ヲ立ツ可シ其保証人ノ義務又ハ担保ハ十五ヶ年ノ後止ム

第二百八十三條 失蹤者ノ現出シ又ハ音信アリタルトキハ失蹤宣言ノ效力ハ即時ニ止ム

失蹤者ハ其財產ヲ現狀ノ儘ニテ取回シ又占有者ノ處分ニ因リテ不當ニ利得シタル

モノヲ取戻スコトヲ得

第二百八十三條 果實ニ付テハ失蹤者カ其亡失又ハ最後音信ノ日ヨリ十ヶ年ノ間

出スルトキハ其五分ノ一ヲ取戻スコトヲ得

十ヶ年ノ後ハ其全部ヲ失フ

第二百八十四條 失蹤者ノ相續順位ニ在ル者ハ他ノ者カ財產占有ヲ得タル日ヨリ三十ヶ年ノ間其財產ノ返還ヲ請求スルコトヲ得

此場合ニ於テモ果實ハ前條ノ規定ニ從ヒテ之ヲ取戻スコトヲ得

第二百八十五條 失蹤シテ生在ノ確實ナラ

カ人ニ歸ス可キ權利ヲ請求スル者ハ其

法典調査會

人カ權利ノ発生セシ曰ニ生存シタルヲ證  
スルコトヲ要ス此舉證ヲ為サザル間ハ其  
請求ヲ受理セス

第二百八十六條 失踪シテ生存ノ確實ナラ  
ザル人ニ歸ス可キ相續ハ次順位ノ者ニ屬  
ス

失踪者ニ歸ス可キ財産ヲ相續スル者ハ財  
産目錄ヲ調製ス可シ

第二百八十七條 前二條ノ規定ハ失踪者又  
ハ其相續人々ニ承継人ニ屬スル相續ノ請  
求其他ノ權利ヲ行フヲ妨リルコト無シ此  
等ノ權利ハ普通ノ時効ニ因ルニ非サレハ  
消滅セス

法典調査會

第二百八十八條 生存ノ確實ナル人カ住所  
居リハ住所ヲ去リテ其財産ヲ管理スル者  
アウサルトキ又ハ裁判所カ未ダ失踪ヲ推  
定セザルニ本人も不在ノ為メ其財産ノ放  
置セラレんとキ又ハ失踪ノ推定中居リハ  
宣言後ニ失踪者ノ生存ノ確實ト為リタル  
トキハ(追裁)前所ハ利害關係人又ハ檢察ノ  
請求ニ因リテ必要ノ保存處存ヲ命ズルコ  
トヲ得

第二章 法人

(人事編)

第五條 法人ハ公私ヲ問ハス法律ノ詔許ス  
ルニ非サレハ成立スルコトヲ得又法律

ノ規定ニ從フニ非カシハ私権ヲ享有スル  
コトヲ得ス

第六條 法律ハ外國法人ノ成立ヲ認許セズ  
但條約又ハ特許アルトキハ此限ニ在ラズ  
成立ノ認許ヲ得タル外國法人ハ日本ニ成  
立スル同種ノ者ト同一ノ私権ヲ享有ス但  
條約中又ハ特許中ニ其權利ヲ制限シタル  
トキハ此限ニ在ラス

(財産取得篇)

第百十八條 民事會社ハ當事者ノ意思ニ因  
リテ之ヲ法人ト為スコトヲ得

此條旨ニ於テハ會社ニ社名ヲ付シ且其契  
約ハ商事會社ノ公示ノ為メ法律ニ規定シ

法典調査會

タル方式ニ從ヒテ之ヲ公示スルコトヲ要  
ス但社名ヲ付シ又ハ公示ヲ為シタルトキ  
ハ其會社ヲ法人ト為ス意思アリト推定ス

(商法)

第七十三條 會社ハ特立ノ財産ヲ所有シ又  
獨立シテ權利ヲ得義務ヲ負フ又訴訟ニ付  
キ原告又ハ被告ト為ルコトヲ得

第百十二條 會社ノ義務ニ付テハ先ツ會社  
財産之ヲ負擔シ次に各社員其全財産ヲ以  
テ連帶シテ之ヲ負擔ス

第百十六條 會社財産ニ屬スル物ハ社員ノ  
債權者其債權ノ為メ之ヲ請求スルコトヲ  
得ス但差入前ニ於テ其物ニ付キ第三者ノ

為ノ權利ノ設定セラレタルトキハ此限ニ在ラス

第百十七條

社算ノ債権者ハ社算自ら要求シ得ヘキ利息又ハ配當金ノミヲ會社ニ對シテ要求スルコトヲ得

然レトモ社算ノ持分ハ社算ノ退社又ハ會社解散ノ場合ニ非サレハ之ヲ要求スルコトヲ得ス

第百十八條

會社ニ對スル債權ト社算ニ對スル債權ト又會社ニ對スル債權ト社算ニ對スル債權トノ相殺ハ會社財産ノ分割前ニ在テハ之ヲ為スコトヲ得ス

第三章 物

財產編

第一條 財產ハ各人又ハ公私ノ法人ノ資産ヲ組成スル權利ナリ

其權利ニ二種アリ 物權及ヒ人權是ナリ

第二條 物權ハ直ニ物ノ上ニ行ハレ且總

テノ入ニ對抗スルコトヲ得ヘキモノニシ

テ主タル有リ從タル有リ

主タル物權ハ之ヲ左ニ掲ク

第一 完全又ハ虧缺ノ所有權

第二 用益權使用權及ヒ住居權

第三 賃借權永借權及ヒ地上權

第四 占有權

法典調査會

從タル物權ハ之ヲ左ニ掲ク

第一 地役權

第二 留置權

第三 動産質權

第四 不動産質權

第五 先取特權

第六 抵當權

右地役權ハ所有權ノ從タル物權ニシテ留

置權以下ハ人權ノ擔保ヲ為ス從タル物權

ナリ

第三條 人權即チ債權ハ定マリタル人ニ對

シ法律ノ認ムル原因ニ由リテ其負擔スル

作為又ハ不作為ノ義務ヲ盡カシムル為メ

行ハルルモノニシテ亦主タル有り從タル

有リ  
從タル入権ハ債権ノ擔保ヲ為ス保護及ヒ  
連帶ノ如シ

第四條 著述者ノ著書ノ發行、技術者ノ技術  
物ノ製出又ハ發明者ノ發明ノ施用ニ付テ  
權利ハ特別法ヲ以テ之ヲ規定ス

第五條 權利ハ物權ト人權トヲ問ハス目的  
物ノ種種ノ區別ニ從ヒテ其様ヲ變スル區  
別ハ物ノ性質、人ノ意思又ハ法律ノ規定ヨ  
リ生ズ即チ下ニ掲ケル如シ

第六條 物ニ有體ナル有り無體ナル有り  
有體物トハ人ノ感官ニ觸ルルモノヲ謂フ  
即チ地所、建物、動物、器具ノ如シ  
無體物トハ智能ノミヲ以テ理會スルモノ  
ヲ謂フ即チ左ノ如シ

法典調査會

第一 物權及人權

第二 著述者、技術者及ヒ發明者ノ權利  
第三 解散シタル會社又ハ清算中ナル

共通ニ屬スル財産及ヒ債務ノ包括

第七條 物ハ其性質ニ因リ又ハ所有者ノ用  
方ニ因リ遷移スルコトヲ得ルト否トニ從  
ヒテ動産タリ不動産タリ其他法律ノ規定  
ニ因リテ動産タリ不動産タル物ヤリ

第八條 性質ニ因ル不動産ハ左ノ如シ  
第一 耕地、宅地、其他土地ノ部分

第二 池沼、溜井、溝渠、堀割、泉源

第三 土手、棧橋、其他地類、工作物

第四 土地ニ定著シタル浴場、水車、風車

又ハ水力蒸氣ノ機械

第五 樹林、竹木、其他ノ植物、但第十二條

ニ記載シタルモノハ、其限ニ在ラス

第六 果實、及ヒ收穫物ノ未タ土地ヨリ

離レサルモノ、但第十二條ニ記載シタルモノハ、其限ニ在ラス

第七 鑛物、坑石、泥炭、及ヒ肥料土ノ未タ

土地ヨリ離レサルモノ

第八 建物、及ヒ其外部ノ戸扉、但第十二

條ニ記載シタルモノハ、其限ニ在ラス

法典調査會

第九 牆、籬、柵

第十 水ノ出入、又ハ瓦斯、温氣ノ引入ノ

為メ、土地、又ハ建物ニ附著シタル、筒管

第十一 土地、又ハ建物ニ附著シタル、電

氣機器

其他、總テ性質ニ因リテ移動ス可キモノト

雖モ、建物ニ必要ナル、附屬物

第九條 動産、所有者カ、其土地、又ハ建物ノ

利用、便益、若クハ粧飾、為メニ、永遠、又ハ不

定ノ時間、其土地、又ハ建物ニ備附ケタル、動

産、又ハ性質ノ、何タルヲ問ハス、用方ニ因ル

不動産、タリ、即チ左ノ如シ、但、反對ノ、證據、亦

ルトキハ、其限ニ在ラス

第一 土地ノ耕作、利用又ハ肥料、為メニ備ヘタル獸畜

第二 耕作作用ニ備ヘタル器具、種々、菓草及肥料

第三 養蠶場ニ備ヘタル蠶種

第四 樹木ヲ支持ニ備ヘタル棚架及ヒ杭柱

第五 土地ニ生スル物品ノ化製ニ備ヘタル器具

第六 工場ニ備ヘタル機械及ヒ器具

第七 不動産ノ常用ニ備ヘタル小舟但  
其水流カ公有ニ係リ又ハ他人ニ屬ス  
ルトキモ亦同シ

法典調査會

第八 園庭ヲ裝置シタル石燈籠、水鉢及ヒ岩石

第九 建物ニ備ヘタル疊、建具其他ノ補足物及ヒ毀損スルニ非サレハ取離スコトヲ得サル匾額、玻璃鏡、彫刻物其他各種ノ粧飾物

第十 修繕中ノ建物ヨリ取離シテ再ヒ之ヲ用ユ可キ材料

第十條 法律ノ規定ニ因ル不動産ハ左ノ如シ

第一 上ニ列記シタル不動産ノ上ニ存スル物權

第二 不動産ノ上ニ存スル物權ヲ取得

セントレ又ハ取回セントスル人權

第三 建築師ノ材料ヲ以テ建物ヲ築造セシムル債權

第四 動産債權ニシテ法律カ不動産ト為レ又ハ各人カ法律ノ規定ニ依リテ不動産ト為シタルモノ

第十一條 自カ又ハ他カニ因リテ遷移スルコトヲ得ル物ハ性質ニ因ル動産タリ但第八條及ト第九條ニ記載シタルモノハ此限ニ在ラス

第十二條 假ニ土地ニ定著セシメタル物ハ用方ニ因ル動産タリ即チ左ノ如シ

第一 建築ノ足場及ト支柱  
法典調査會

第二 建築ヲ為スノ間其用ニ備ヘタル小屋

第三 植木師及園丁カ賣ル為ニ培養シ又ハ保存シタル草木

第四 取毀ツ為メニ譲渡シタル建物其他ノ工作物又ハ收去スル為メニ譲渡シタル樹木及ト收穫物

第十三條 法律ノ規定ニ因ル動産ハ左ノ如シ

第一 上ニ指定シタル動産ノ上ニ存スル物權

第二 有體動産ヲ取得シ又ハ取回セントスル債權但不動産ヲ以テ其擔保ニ

充ツルトキモ亦同レ

第三 所為ヲ成就セシメ又ハ權利ノ行使ヲ止メシムル債權縱令其權利カ不動産タルトキモ亦同レ

第四 法人タル會社存立ノ間社負カ其會社ニ對シテ有スル權利縱令不動産カ會社ニ屬スルトキモ亦同レ

第五 著述者、技術者及ヒ發明者ノ權利解散シタル會社又ハ消算中ナル共通ニ屬スル財産ノ一分ニ付テ有スル權利ノ動産タリ不動産タル性質ハ分割ニ於テ各利害關係人ノ受クル財産ノ性質ニ因リテ定マル

法典調査會

當事者ノ一方ノ選擇ニ任スル動産又ハ不動産ヲ目的トスル擇一債權ノ性質モ亦其辨濟ニ付キ選擇シタル物ノ性質ニ因リテ定マル

第十五條 物ハ他ニ附屬セスレテ完全ナル効用ヲ為スト否トニ從ヒテ主タル有り從タル有り

用方ニ因ル不動産ハ性質ニ因ル不動産ノ從ナリ地役ハ要役地ノ從ナリ債權ノ擔保ハ債權ノ從ナリ

第十六條 物ハ左ノ如ク之ヲ視ルコトヲ得  
第一 特定物即チ某家某田某獸ノ如キ  
殊別ナル物

第二 定量物即十金幾圓、米幾石、布幾反、如キ數量尺度ヲ以テ算ル物

第三 聚合物即キ群畜、書庫、書籍、店舖ノ商品、如キ増減レ得、キ多少類似ナル物

第四 包括財産即キ相続ノ總動産若クハ總不動産又ハ相續ノ全部若クハ一部分ノ如キ資産ノ全部又ハ一部分ヲ組成スル物

第十七條 物ハ其性質ニ因リ一回ノ使用ニテ消費スルト否トニ從ヒテ消費物タリ不消費物タリ

第十八條 物ハ當事者ノ意思又ハ法律ノ規

法典調查會

定ニ因リ同種ノ物ヲ以テ代フルコトヲ得ルト否トニ從ヒテ代替物タリ不代替物タリ

定量物及ヒ一回ノ使用ニテ消費スル物ハ概シテ之ヲ當事者ノ意思ニ因ル代替物ト者做ス

第十九條 物ハ其性質、當事者ノ意思又ハ法律ノ規定ニ因リ形體上又ハ智能上分割スルコトヲ得ルト否トニ從ヒテ可分物タリ不可分物タリ

或ル地役及ヒ或ル作為又ハ不作為ノ義務ハ性質ニ因ル不可分物ナリ  
物、一部分ノ供與ヲ以テ合意ノ目的タル便

益ヲ與フルコト能ハサルトキハ其物ハ當  
事者ノ意思ニ因ル不可分物ナリ

抵當及ヒ債權ノ物上擔保ハ法律ノ規定ニ  
因ル不可分物ナリ

第二十條 物ハ所有ニ屬スルモノ有リ所有  
ニ屬セサルモノ有リ

所有ニ屬スル物トハ公私ノ資産ノ部分ヲ  
為スモノヲ謂フ

所有ニ屬セサル物トハ無主又ハ公共ノモ  
ノヲ謂フ

第二十一條 公ノ法人ニ屬スル物ニ公有及  
ヒ私有ノ二種アリ

第二十二條 公ノ法人ニ屬レ國用ニ供レタ  
ル物ハ公有ノ部分ヲ為ス即チ左ノ如シ

法典調查會

第一 國領ノ海及ヒ海濱但海濱ハ春分

秋分最高潮ノ到ル處ヲ以テ限ト為ス

第二 道路舟若クハ筏ノ通ス可キ川又  
ハ堰割及ヒ其床地

第三 城砦壘壁其他陸海防禦ノ工作物

第四 軍用ノ工廠船舶兵器機械其他ノ

物品

第五 官廳ノ建物

第二十三條 公ノ法人カ各人ト同一ノ名義  
ニテ所有スル物ニレテ金錢ニ見積ルコト

ヲ得ル收入ヲ生ス可キモノハ其私有ノ部  
分ヲ為ス即チ國府縣市町村有ノ海濱樹林

牧場ノ如シ

所有者ナキ不動産及相續人ナクシテ死亡シタル者、遺産ハ當然國ニ屬ス

第二十四條 無主物トハ何人ニモ屬セスト  
雖モ所有權ノ目的ハ為ルコトヲ得ルモノ  
ヲ謂フ即チ遺棄ノ物品、山野ノ鳥獸、河海ノ  
魚介ノ如シ

第二十五條 公共物トハ何人ノ所有ニモ屬  
スルコトヲ得スレテ總テ人ノ使用スルコ  
トヲ得ルモノヲ謂フ即チ空氣、光線、流水、大  
洋ノ如シ

第二十六條 物ハ私ノ所有權又ハ債權ノ目  
的ト為ルコトヲ得ルト否トニ從ヒテ融通  
物タリ不融通物タリ

法典調査會

公ノ秩序ノ為メ法律ニ於テ處分ヲ禁シタル  
物及ヒ公有ノ財産ハ不融通物ナリ

第二十七條 物ハ讓渡スエトヲ得ルモノ有  
リ讓渡スエトヲ得サルモノ有リ

所有權ヨリ支分シタル使用權又ハ住居權  
要役地ヨリ分離セルモノト看做シタル地  
役及ヒ政府ノ與ヘタル開坑ノ特許其他ノ  
特權ハ概シテ融通物ナリト雖モ讓渡スコ  
トヲ得サルモノナリ

第二十八條 物ハ法律ニ定メタル條件ヲ具  
備スル占有ニ附著セル取得ノ推定ヲ受ク  
ルト否トニ從ヒテ時効ニ罹ルコトヲ得ル

モノ有り時効ニ罹ルコトヲ得サルモノ有

第二十九條

物ハ其所有者ノ債権者ヲ強制

賣却ヲ請求スルコトヲ得ルト否トニ從ヒ

テ差押アルコトヲ得ルモノ有り差押アル

コトヲ得サルモノ有り

不融通物讓渡スコトヲ得サル物其他法律

ノ規定又ハ人ノ處分ニテ差押ヲ禁シタル

物ハ差押アルコトヲ得サルモノナリ即チ

無償ニテ設定シタル終身年金權ノ如シ

第四章 法律上ノ行為  
第一節 意思ノ表示

(財産編)

第三百六条 承諾トハ利害關係人トシテ右  
意ニ如ハル總當事者ノ意思ノ合致ヲ謂フ  
當事者中ノ一人カ承諾セカルトキハ他ノ  
當事者カ承諾シタルモ合意ハ成立セス但  
此ニ異ナル意思ノ存セシ詭效アルトキハ  
此限ニ在ラス

第三百七条 承諾ハ書面口頭又ハ容態ヲ以  
テ之ヲ異フルコトヲ得但此等ノ場合ニ就  
テハ他ニ同意ヲ表スルノ手段ナキコト且  
承諾スル意思ノ確證アルコトヲ要ス

法典調査會

又承諾ハ事情ニ因リテ黙テヨリ成ルコト  
ヲ得

第三百九条 當事者ノ錯誤ニテ合意ノ性質  
目的又ハ原因ノ若限ニ相違アリシトキハ  
其錯誤ハ承諾ヲ阻却ス

合意ノ縁由ノ錯誤ハ其錯誤ノトニテハ無  
効ノ原因ヲ成サズ但當事者ノ一方ノ詐欺  
ニ因レテ成ルモノハ此限ニ在ラス

當事者ノ身上ノ錯誤ハ其身上ニ所テシ著  
眼カ合意ノ原因タリシトキハ其錯誤ハ承  
諾ヲ阻却ス

身上ノ著眼カ合意ノ所隨ノ原因タルニ過  
キサルトキハ其合意ハ其身上ノ錯誤ノ為メ

單ニ取消スコトヲ得ハキモノナリ

第三百十條 物上ノ錯誤カ物ノ品直ニ存スルトキハ其錯誤ニ承認ノ瑕疵ヲ成ス但品直ニ付テノ著眼カ當事者ノ注意ヲ助成セサルトキハ瑕疵ニ在ラズ

之ニ及レテ物ノ品格ニ存スル錯誤ハ承認ノ瑕疵ヲ成サズ但當事者ノ意思カ明示ハ事情ニ因リテ品格ニ著眼セラルトノ明白ナルトキハ此限ニ在ラズ物ノ時代ニ趣又ハ因方ノ如キ思想上ノ品格ニ付テモ亦同シ

合意ノ履行ノ時期又ハ場所ニ存スル錯誤ニ付テハ前項ノ規定ニ從フ

法典調査會

算數式名護書ノ日所又ハ場所ノ錯誤ニ付テハ才白才十九條ノ規定ニ從フ

第三百十一條 法律ノ錯誤カ或ハ右意ノ性質原因又ハ知力ニ存スルトキ或ハ物ノ資格又ハ人ノ制限ニ存シテ其資格若クハ制限力決意ヲ為サシメタルトキハ其錯誤ハ事實ノ錯誤ノ如ク承認ヲ却却シ又ハ其瑕疵ヲ成ス

然レトモ裁判所ハ窮蹙ス可キ情狀アルニ非サレハ右錯誤ノ為メ合意ノ趣効ヲ認許スルコトヲ得ス

法律ノ錯誤ハ畫期ニ付テ時期ヨリ生スル法律上ノ生權ニ付シ又ハ行為ノ原因ヨリ

生じぬ無効。利し他云ノ程序ニ係ル臨  
体規則ノ不知ニ科シテモ為事者ヲ救護ス  
ル存ナニ之ヲ認許セム

第百十二條

詐欺ハ承諾ヲ阻却セム又其  
瑕疵ヲ成サズ但詐欺リ錯誤ヲ惹起シ其錯  
誤ノミヲ以テ前三條ニ記載セム如ク承諾  
ヲ阻却シ又ハ其瑕疵ヲ成ストキハ此限ニ  
在ラズ

此他ノ場合ニ於テハ詐欺ハ之ヲ行ヒタル  
者ニ対スル損害賠償ノ訴權ノミヲ生ス  
然レトモ為事者ノ一方カ詐欺ヲ行ヒ其詐  
欺カ他ノ一方ヲシテ左意ヲ為スコトニ決  
意セシメタルトキハ其一方ハ補償ノ名義

法典調査會

ニテ右意ノ取消ヲ求メ且損害アルトキハ  
其賠償ヲ求ムルコトヲ得但其在左ノ取柄  
ハ善意ナルオモ者ヲ求ムルコトヲ得ズ

第百十三條

強暴ハ為事者ノ一方カ抵抗  
スルコトヲ得サル暴行脅迫ヲ受ケタルニ  
因リ狂ケテ右意ヲ為シタルトキハ左意ヲ  
阻却ス

為事者ノ一方カ不可抵抗ニ出ラサル脅迫  
ノ侵害ヲ避クル為メ執慮セムノ暇ナクシ  
テ過度ナル義務ヲ負シ又ハ此是處ニ誤  
信ヲ為シタルトキモ亦同シ

暴行脅迫又ハ災害カ抵抗ニ可カラザルニ  
非カルモ為事者又ハオモ者ノ身付財産ノ

為ニ切迫ニシテ一層重大ノ害ヲ避クル為  
ニ當事者ヲシテ合意ヲ為スコトニ決意セ  
シノタルトキハ強暴ハ承諾ノ瑕疵ヲ成ヌ  
第三百十四條 強暴ニ因リテ身體財産ニ危  
難ノ恐ヲ受ケタル才ニ者カ當事者ノ配偶  
者又ハ直系ノ親族若クハ姻屬ナルトキハ  
其強暴ハ常ニ之ヲ當事者ニ加ヘクリト着  
做ス

其他ノ人ニ付テハ親族ナルト姻屬ナルト  
又ハ外人ナルトヲ問ハス裁判所ハ此等ノ  
者ニ對シテ加ヘクル強暴カ當事者ノ承諾  
ニ及ボセシ影響ヲ其事情ニ從ヒテ査定ス  
第三百十五條 強暴ハ當事者ノ一方ノ所為

法典調査會

ニホラタルト才ニ者ノ所為ニホラタルト  
又才ニ者カ是一方ニ通謀セルト否トヲ問  
ハス上ノ區別ニ從ヒテ承諾ヲ阻却シ又ハ  
其瑕疵ヲ成ヌ

第三百十六條 強暴ヲ受ケタル一方ハ合意  
ヲ銷除スルコトヲ得ル場合ニ於テモ強暴  
ヲ行ヒタル者ニ對シ損害賠償ノミヲ請求  
シテ其合意ヲ維持スルコトヲ得  
強暴カ合意ノ決意ヲ為シシメタルニ非ヌ  
シテ單ニ不利ナル條件ヲ承諾セシメタル  
トキハ其合意ハ銷除スルコトヲ得ヌ但賠償  
債ノ要求ヲ妨ケヌ

第三百十七條 強暴ノ場合ニ於テ裁判所ハ

當事者ノ男女、年齡、婚姻、智愚及相互ノ身分ヲ斟酌ス可シ尊嚴親然レトモ卑屬親ニ對スル尊敬ノ意ニホテタル畏懼ハ信義ヲ取消ス理申ト爲ラズ

(高法)

第二百七十四條 商事契約ハ明示又ハ默示ニテ之ヲ取結フコトヲ得

第二百八十條 第二百七十七條ニ掲ケタル契約ハ書面ニ作成セムト雖モ後ニ至リ當事者ニ於テ殊ニ雙務契約ノ場合ニ在テハ其雙方ニ於テ實際之ヲ履行シ又ハ書面ヲ以テ之ヲ承認シタルトキハ其効力アリ

第三百一十條 商事契約ハ強暴詐欺又ハ錯誤アル場合ニ於テハ之ニ對シテ異議ヲ述フルコトヲ得然レトモ大ナル損失ニ因リ殊ニ代價其他ノ報償ノ不相當ナルニ因リテ異議ヲ述フルコトヲ得ズ

法典調査會

(附屬條) 第二節 代理

第二百三十二條 代理ニハ總理ノモノアリ

總理代理ハ爲ス可キ行為ノ限定ナキ代理ニシテ委任者ノ資産ノ管理ノ行為ノミヲ包含ス

代理力或ハ管理或ハ處分或ハ義務ニ關シテ一箇又ハ數箇ノ限定セル行為ヲ目的トスルトキハ其代理ハ部理ナリ

第二百三十三條

凡ソ代理ハ總理ナルト部  
理ナルトヲ問ハス其目的タル行為ヨリ必

然ニ生ス可キ事柄ヲ暗ニ包含ス

然レトモ元本ヲ諾約スル委任ハ其辯済ヲ

為ス委任ヲ包含セス

元本ヲ要約スル委任ハ其辯済ヲ受クル委

任ヲ包含セス

訴訟ヲ為ス委任ハ仲裁人ヲ選任シ請求ニ

承服シ訴訟ヲ取下ケ又ハ和解ヲ為ス委任

ヲ包含セス

和解ヲ為ス委任ハ仲裁人又ハ裁判所ヲシ

テ其争論ヲ裁決セシムル委任ヲ包含セス

仲裁人ヲ選任スル委任ハ和解ヲ為シ又ハ

裁判所ヲシテ其争論ヲ裁決セシムル委任

ヲ包含セス

第二百三十五條

代理人ハ其管理行為ノ全

部又ハ一方ニ存キ他人ヲシテ自己ニ代ハ

ラシムルコトヲ得但此ヲ明示ニテ禁止セ

サルトキ又ハ事件ノ性質ニ因リテ身ヲ代

理人ノミニ委任シタリト看做ス可カラサ

ルトキニ限ル以場合ニ於テ代理人ハ自己

ノ管理ニ於ケル如ク其復代人ノ管理ノ責

ニ任ス

委任者カ復代人ヲ指定シタルトキハ代理

人ハ其指定ニ従フコト能ハサル場合ニ於

テモ他人ヲ選任スルコトヲ得ス代理人カ

法典調査會

其指定ニ從ヒ選任ヲ爲シタル場合ニ於テハ代理人ハ其復代人ノ無能又ハ不誠實ニ付キ委任者ニ之ヲ告知スルニトモ怠リ又ハ復代人ヲ解任スルコトヲ怠リタルニ非カレハ其責ニ任セズ

委任者ノ禁止シタルニ拘ハラズ復代人ヲ選任シ又ハ其承諾セザル人ヲ選任シタル場合ニ於テハ代理人ハ意外ノ事又ハ不可抗力ニ因リテ生ズル損害ニ付テモ其責任又但此復代人ノ選任ヲ爲サレハ其損害ノ生ゼサル可カリシトキニ限ル

第二百三十六條 前条第一項及ヒ第二項ノ場合ニ於テ委任者ハ復代人ニ對シ其管理

法典調査會

ニ関スル訴權ヲ直接ニ行フコトヲ得又之ニ對シ直接ニ責任ヲ負擔ス

同条第三項ノ場合ニ於テ委任者ハ直接訴權ト代理人ノ名ヲ以テスル間接訴權トノ間ニ選擇權ヲ有ス然レトモ直接訴權ヲ行ヒタルトキハ其復代人ノ選任ヲ認諾シタルモノト看做ス

第二百三十九條 代理人ハ委任事件ヲ成就

セシタルコトニ付テハ善良ナル管理人タルノ注意ヲ爲ス責ニ任ズ

然レトモ左ノ場合ニ於テハ代理人ノ過失ハ較ヤ寛大ニ之ヲ査定ス

才一 代理人カ賠償ニテ代理ヲ爲ストキ

才ニ 代理人カ自ラ求テ代理ヲ爲シタ

ルニ非サルトキ

才三 委任者カ代理人ノ不熟練ナルニト  
テ了知シ又ハ之ヲ推量シタルトキ

才四 代理人カ管理ノ或ル行為ニ付テ委  
任者ヲシテ其豫期セカリシ利益ヲ得セ  
シメタルトキ

第四百四十四條

代理人カ委任者ノ為メ委

任者ノ名ヲ以テ才三者ト爲シタル行為ノ  
履行ニ付テハ代理人ハ其才三者ニ對シテ  
責ニ任セス但代理人カ明示ニテ履行ノ責  
ニ任シ又ハ才三者ニ對シテ已レノ有セカ  
ル權限ヲ有スルモノ、如ク示シタルトキ

法典調査會

ハ此限ニ在ラス

第二百五十五條

委任者ハ代理人カ委任ニ從

ヒ委任者ノ名ニテ約束セシ才三者ニ對シ  
テ負擔シタル義務ノ責ニ任マ

委任者ハ右ノ場合ニ就テハ代理人ノ權限

外ニ爲シタル事柄ニ付テモ亦其責ニ任ス

才一 委任者カ明示又默示ニテ代理人ノ

行為ヲ認識シタルトキ

才二 委任者カ代理人ノ行為ニ因リテ利

益ヲ得タルトキ但其利益ノ限度ニ從フ

才三 才三者カ善意ニシテ且代理人ニ權

限アリト信ズル正當ノ理由ヲ有シタル

トキ

第二百五十八條 委任者カ代理人ヨリ委任狀ヲ取戻シタルトキトモ悔意ナシニ代理ノ欲ヲ知ラズシテ代理人ト約束シタル者ニハ代理終了ノ原因ヲ以テ對抗スルコトヲ得ズ

第二百五十九條 代理カ上ニ掲ケタル原因ノ一ニ由リテ終了セシトキハ代理人又ハ其相續人ハ委任者又ハ其相續人カ既ニ生シタル利益ヲ自ラ處理シ又ハ新代理人ヲシテ之ヲ處理セシムルコトヲ得ルニ至ルマテ其利益ヲ處理スルコトヲ要ス  
此規定ハ代理ノ終了カ代理人ノ抛弃ニ因リルトキハ委任者ノ廢罷ニ因リルトキヲ

法典調査會

リモ一層嚴ニ之ヲ適用ス

(高法)

第三百四十一條 高取引ノ取結ノ為メニスル委任ハ總テノ場合ニ於テ其取引取結ノ為メニスル代理ト看做ス但委任者カ代理スノ行為ニ承諾ヲ與フルコトヲ要スル旨ヲ明示シタルトキハ此限ニ在ラズ  
代理人ハ委任ヲ行フ際至重ノ注意ヲ為ス  
義務アリ

第三百四十二條 委任者ノ名ヲ以テシタルトモトモ同ハ之委任者ノ為メニ代理ノ取結セタル高取引ニ因リ委任者ハ直接ニ之三者ニ對シテ權利ヲ得再義務アリ

第三百四十三條 委任又ハ事後ノ承諾ヲ受  
クモコト無クシテ亦ニ者ノ爲ノニ或人ト  
取引ヲ取結ノ者ハ其人ニ對シテ委任ヲ負  
フ

第三百四十四條 取引取結ノ際其委任ノ權  
限ヲ超越スル者ハ亦ニ者カ其超越ヲ知ラ  
ズ又ハ知ルコト能ハザリシトキハ委任者  
ニ對シテ委任ヲ負フ

第三百四十五條 代理人カ他人ノ爲ノ高取  
引ヲ取結ヒタル場合ニ於テ相手方カ自己  
ノ過失ニ非ズシテ代理ナルコトヲ知ラズ  
又ハ委任者ヲ知ラザリシトキハ其相手方  
ハ委任者ノ不履行ニ因リテ被フリタル損

法典調査會

害ニ付キ其代理人ニ對シテ賠償ヲ求ムル  
權利アリ

第三百四十七條 代理ハ委任者ノ承諾アリ  
又ハ其承諾ヲ得ヘキモノト推定ス可キ情  
況アリニ非サレハ之ヲ亦三者ニ轉付スル  
コトヲ得ズ

財產編

第三節 無效及取消

第三百十八條 錯誤、強暴、詐欺及ヒ無能力ハ之ヲ推定セス其申立人ヨリ之ヲ證スルコトヲ要ス

當事者ノ雙方ニ屬スル銷除許權ノ方法ハ相互ノ非理ニ基クトキト雖モ互ニ毀滅ヒス但損害アルトキハ其賠償ヲ相妨ケス

第三百十九條 前數條ノ場合ニ於ケル銷除許權ハ無能力者又ハ瑕疵アル承諾ヲ喫ヘタル者ノニニ屬ス

然レトモ處刑ノ言渡ヨリ生スル無能力ハ言渡ヲ受ケタル者ト台意ヲ爲シタル者ヨ

法典調查會

リ之ヲ申立ツルコトヲ得

第三百二十條 取消スコトヲ得ハキ台意ヲ

第三章第七節ニ定メタル期間ニ攻撃セキルトキハ默示ニテ之ヲ認諾ニタルモノト看做ス

此他默示認諾ノ場合及ヒ明示認諾ノ方式ハ右回節ノ規定ニ從フ

第五百四十四條 無能力者又ハ錯誤ニ因リ

テ承諾ヲ喫ヘタル人又ハ強暴若クハ詐欺ニ因リテ承諾ヲ獲ラレタル人ノ約シタル義務ハ五ヶ年間ハ或ハ其人又ハ其代人ノ請求ニ因リ或ハ履行ノ許ニ對シ此等ノ者ヨリ爲シタル抗辯ニ因リテ裁判上之ヲ銷

除スルコトヲ得

第五百四十五條 右時效ノ期間ハ發暴ニ付テハ其發暴ノ止ムマテ錯誤ニ付テハ其錯誤ヲ覺知スルマテ詐欺ニ付テハ其詐欺ヲ發見スルマテ豫能力ニ付テハ其豫能力ノ止ムマテ之ヲ停止ス

然レトモ瘋癲者又ハ喪心ニ因ル禁治産者ノ合意ニ付テハ右時效ハ其者カ能力ヲ復シタル後其承諾シタル行為ノ通知ヲ受ケ又ハ其行為ヲ了知シタル時ヨリ進行ス

治産ヲ禁セラレタル廢刑人ニ付テハ銷除ノ許權及ヒ抗辨ハ自他ノ爲メ其刑期満了後ニ非サレハ時效ニ罹ラス

法典調查會

此他免責時效ノ停止及ヒ中斷ノ通常ノ原因ニ関スル規定ハ右時效ニ之ヲ適用ス

第五百四十六條 銷除許權ヲ有スル人カ前條ノ期間ノ満了前ニ死亡シタルトキハ許權ハ其相續人ニ移轉ス

右ノ場合ニ於テ期間カ死亡者ニ對シテ未ダ進行ヲ始メザリヒトキハ相續人ノ許權ハ其相續ノ時ヨリ時效ニ罹リ既ニ進行ヲ始メタルトキハ其後期ヲ以テ時效ニ罹ル但證據論第百二十九條ニ記載セル停止ハ此限ニ在ラス

第五百四十七條 未成年者又ハ禁若童者ノ欺産ニ關シ後見人ノ爲シタル合意及ヒ行為

ハ無能力者ノ利益ノ爲メ法律ノ定メタル  
方式及ヒ条件ヲ遵守セカリシトキハ之ヲ  
銷除スルコトヲ得

未成年者自治産ノ未成年者及ヒ準禁治産  
者ノ行爲ニ付テハ特別ナル方式及ヒ条件  
ニ依ラザリシトキ又禁治産者ノ行爲ニ付  
テハ何等ノ場合ヲ問ハス亦其行爲ヲ銷除  
スルコトヲ得

但規定ハ有能力的者ノ爲メニ許與セル銷除  
ノ許權ヲ妨ケス

第五百四十八條 未成年者一人ニテ特別ナ  
ル方式又ハ条件ノ必要ナキ合意又ハ行爲  
ヲ承諾シタルトキハ銷除許權ハ其未成年

法典調査會

者ノ爲メ缺損アルトキニ非カレハ之ヲ受  
理セス

法律カ保佐人ノ立會ノミヲ要シタルトキ  
其立會ナクシテ自治産ノ未成年者及ヒ準  
禁治産者ノ爲シタル右ト同一ナル性質ノ  
行爲ニ對シ亦缺損ニ因ルニ非カレハ銷除  
許權ヲ行フコトヲ得ス

缺損ハ行爲ノ時ニ於テ之ヲ見積リ其偶然  
ノ事件ヨリ生スルモノハ之ヲ算入セス

第五百四十九條 未成年者カ成年ナリト陳  
述シタルノミニシテ成年タルコトヲ信セ  
シムル爲メ自ラ詐術ヲ用井カルトキハ其

無能力又ハ欠損ニ因ル銷除訴権ヲ妨ケス  
此他ノ無能力者ノ重傷ノ疎速ニ付テモ亦  
同シ

第五百五十一條 婦ノ行爲ハ配偶者ノ相互  
ノ權利及ヒ本分ニ関シ法律ニ定メタル場  
合ニ非サレハ婦又ハ夫ノ請求ニ因リテ之  
ヲ銷除スルコトヲ得ス

第五百五十二條 承諾ノ瑕疵ニ因リテ行爲  
ノ銷除ヲ得タル成年者ハ其行爲ニ因リテ  
既ニ受取リタル總テノ物ヲ返還スル責ニ  
任ス

無能力者ハ銷除ヲ得タル行爲ニ因リテ仍  
ホ現ニ己レヲ利スル物ノミヲ返還スル責

法典調査會

ニ任ス

右返還ヲ要求スル訴権ハ通常ノ時効ニ因  
ルニ非サレハ消滅セス

第五百五十三條 不動産ノ讓渡力無能力錯  
誤又ハ強暴ノ瑕疵ニ因ル銷除ニ服スル片  
ハ第五百五十二條及ヒ第五百五十三條ノ  
區別及ヒ各件ニ從ヒ第三取得者ニ對シテ  
其銷除ヲ為スコトヲ得

第五百五十四條 銷除訴権ハ第五百四十四  
條乃至第五百四十六條ニ定メタル時効ニ  
因リテ消滅スル外第五百四十五條ニ從ヒ  
テ時効ノ進行ヲ妨メタル後利害關係人カ  
銷除スルコトヲ得ヘキ合意ヲ明示又ハ黙

示ニテ認諾シタル片ハ之ヲ行フエトヲ得  
ス

第五百五十五條 明示ノ認諾ハ銷除スルエ

トヲ得ヘキ合意ノ要旨及ヒ其銷除ノ原因

ヲ記シ且銷除詠權ノ拋棄ヲ述ヘタル明白

ナル証書ニ因リテ成ル

銷除ノ數箇ノ原因アル片ハ明示ノ認諾ハ

特ニ証書ニ記シタル原因ニ付テノ其效

ヲ生ス

第五百五十六條 默示ノ認諾ハ左ノ行為ニ

因リテ成ル

法典調査會

第一 合意ノ全部若クハ一部ノ任意ノ履

行

第二 異議ナキ又ハ異議ノ留保ナキ強制

ノ執行

第三 更改

第四 物上又ハ對人ノ擔保ノ任意ノ供與

默示ノ認諾ハ債權者ニ在テハ銷除スルエ

トヲ得ヘキ合意ノ履行ノ請求ニ因リ又ハ

其合意ヲ以テ取得シタル物ノ全部若クハ

一分ノ任意讓渡ニ因リテ成ル

第五百五十七條 認諾ハ銷除詠權ヲ有スル

者ノ特定ノ承継人ノ權利ヲ害スルエトヲ

得ハ

第五百五十八條 初ヨリ無效ナル行為ハ之

ヲ認諾スルエトヲ得ス但第五百六十五條

ニ掲ケタル規定ヲ妨ケス

第五百五十九條 算數氏名、日附又ハ場所ノ  
錯誤ノ改正ヲ目的トスル許權ハ時効ニ罹  
ルコトナシ但此許權ノ附屬スル權利ノ時  
効ヲ妨ケス

法典調査會

第四節 期限及條件

(財産編)

第四百二條 義務ノ成立カ初ヨリ正確ニシ

テ且即時ニ要求スルコトヲ得ヘキトキハ其義務ハ單純ナリ

第四百三條 債權者ク或ル時期前又ハ時期

ハ確定セサルモ必ズ到來スヘキ或ル事件ノ到來前ニ履行ヲ求ムルコトヲ得サルトキハ其義務ハ有期ナリ

當事者ノ定メタル期限又ハ法律ニ依リテ許與シタル期限ハ之ヲ權利上ノ期限トスル債權者ノ爲シ得ヘキ時又ハ欲スル時ニ辨濟スヘシトノ語辭アルトキハ裁判所ハ債

法典調査會

權者ノ請求ニ依リ事情ニ從ヒ及ヒ當事者ノ意思ヲ推定シテ其履行ノ期間ヲ定ム但當事者カ無期ノ年金權ヲ設定センハ欲シタル場合ハ此限ニアラズ

第四百四條 債務者ハ期限ノ利益ヲ拋棄シ

テ満期前ニ其義務ヲ履行スルコトヲ得但  
要約ニ因リ又ハ事情ニ因リテ當事者双方ノ利益又ハ債權者カ利益ノ爲メニ期限ヲ定メタル証據アルトキハ此限ニ在ラス  
債權者ノミノ利益ノ爲メニ期限ヲ定メタル場合ニ於テハ債權者ニ其期限ヲ拋棄スルコトヲ得

當事者カ錯誤ニ因リテ満期前ニ辨濟シタ

ル場合ニ於テハ第三百六十六條ノ規定ニ  
從フ

第四百五條 債務者ハ左ノ場合ニ於テ債權  
者ノ請求ニ依リ權利上ノ期限ノ利益ヲ失

第一 債務者カ破産シ又ハ顯然無資力ト  
為リタルトキ

第二 債務者カ財産ノ多分ヲ讓渡シ又ハ  
其多分カ他ノ債權者ノ差押ヲ受ケタル  
トキ

第三 債務者カ其供シタル特別ノ擔保ヲ  
毀滅シ若クハ減少シ又ハ其豫約シタル  
擔保ヲ供セサルトキ

法典調査會

第四百六條 債權者カ填補利息ヲ拂ハサルトキ  
又執行力ヲ有スル證書アル場合ト雖モ債  
務者カ不幸且善意ニシテ債權者カ猶豫ノ  
為メ確實ノ損害ヲ受ケサル可キトキハ裁  
判所ハ債務者ニ相應ナル恩惠上ノ期限ヲ  
許與スルエトヲ得

又裁判所ハ右ノ條件ニ從ヒテ債務ノ一分  
ヲツノ履行ヲ許スエトヲ得

右ニ反スル要約ハ總テ無効ナリ

第四百七條 恩惠上ノ期限ヲ得タル債務者  
ハ第四百五條ニ定メタル場合ノ外尚左ノ  
場合ニ於テモ之ヲ失フ

第一 債務者々逃亡シ又ハ住所ヲ去リテ

債権者ニ其居所ヲ隠秘スルトキ

第二 債務者カ一箇年以上ノ禁錮ノ刑ヲ

受ケタルトキ

第三 債務者ク言渡ヲ受ケタル條件ノ一

ヲ行ハサルトキ

第四 債務者カ法律上ノ相殺ヲ為シ得ハ

キ場合ニ於テ自ラ其權(債)者ノ債権者ト

為リタルトキ

恩惠上ノ期限ハ裁判所ニ於テ更ニ之ヲ延

フルコトヲ得ス

第四百八条 當事者又ハ法律カ義務ノ發生

又ハ消滅ヲ未來且不确定ノ事件ノ有無ニ

法典調查會

繫ラレムルトキハ其義務ハ條件附ナリ此

條件ハ第一ノ場合ニ於テハ停止ニシテ第

二ノ場合ニ於テハ解除ナリ

物權モ亦主タルト後タルトヲ問ハス之ヲ

停止又ハ解除ノ條件ニ繫ラレムルヲ得

第四百九条 停止ノ條件ノ成就スルトキハ

合意ノ日ニ遡リテ其效ヲ生ス

解除ノ條件ノ成就スルトキハ當事者ヲシ

テ合意前ノ各自ノ地位ニ復セシム

第四百十條 停止又ハ解除ノ條件カ成就セ

サル間ハ當事者ノ各自ハ條件ヲ帯ヒタル

權利ヲ其儘ニ第三者ニ授與スルコトヲ得

然レトモ其條件ヲ第三百四十七條以下ニ

定メタル方法ニ從ヒテ公示シタルニ非サ  
レハ當事者ノ一方又ハ其承継人ハ之ヲ以  
テ他ノ一方ノ承継人ニ對抗スルコトヲ得  
ス

第四百十一條 解除條件ヲ帶ヒタル權利ヲ  
有スル者ノ善意ニ出テ且法律ニ從ヒテ為  
レタル管理ノ行為ハ第三者ノ利益ノ為メ  
ニ之ヲ保持ス

解除條件ヲ帶ヒタル權利ヲ有スル當事者  
ノ一方ト第三者ト對シテ言渡サレタル判  
決ハ他ノ一方又ハ其承継人ニ之ヲ援用スル  
コトヲ得

然レトモ右判決ハ他ノ一方ノ當事者又ハ

法典調査會

其承継人ヲ異議申述ノ為メニ訴訟ニ召喚  
セザリントキハ之ヲ以テ其當事者又ハ承  
継人ニ對抗スルコトヲ得ス但其判決ヲ管  
理ノ行為ノミニ關スルトキハ此限ニ在ラ  
ス

第四百十二條 條件ノ成就シタルトキハ物  
又ハ金錢ヲ引渡シ又ハ返還スル時當事者  
ハ其成就セサル間ニ收取シ又ハ満期ト為  
レル果實差クハ利息ヲ交付スルコトヲ要  
ス但當事者間ニ及對ノ意思アル証拠カ事  
情ヨリ生スルトキハ此限ニ在ラス

第四百十三條 合意ノ主タル目的ヲ不能又  
ハ不法ノ條件ニ繫ラレシメタルトキハ其合

意ハ無效ナリ

當事者ノ一方カ或ハ禁止ノ行為ヲ行ヒ又ハ本分ノ義務ヲ盡ササルニ因リテ自己ニ利ヲ得或ハ禁止ノ行為ヲ行ハス又ハ本分ノ義務ヲ盡スニ因リテ自己ニ害ヲ受リヘキトキハ其條件ハ不法ナリ

不能又ハ不法ノ條件カ合意ノ後タル効力ノミニ關スルトキハ其約款ノミ成立セス  
第四百十四條 條件カ偶成ナルトキ又ハ其全部若クハ一部分カ要約者ノ随意ナルトキ諾約者カ其成就ヲ妨ケタルニ於テハ其條件ハ之ヲ成就シタルモノト看做ス

第四百十五條 條件カ全ク當事者ノ一方ノ

法典調査會

随意ナルトキハ他ノ一方ハ其成否ヲ決ス可キ或ル期限ヲ定メント裁判所ニ請求スルコトヲ得

第四百十六條 有的條件ノ為メ當事者又ハ裁判所カ或ル期限ヲ定メタル場合ニ於テ事件カ到来セスレテ此期限ヲ經過シタルトキハ其條件ハ之ヲ成就セサルモノト看做ス條件ノ成否ノ為メ期限ヲ定メタルト否トヲ問ハス事件ノ到来セサルコトノ確實ト為リタルトキモ亦同レ

無的條件ノ為メ或ル期限ヲ定メタル場合ニ於テ事件カ到来セスレテ其期限ヲ經過シタルトキハ其條件ハ之ヲ成就シタルモ

ノト有做ス又其期限ヲ定メタルト否トヲ  
問ハス事件ノ到来セサルエトノ確實ト為  
リタルトキモ亦同レ

右孰レノ場合ニ於テモ裁判所ハ當事者ノ  
定メタル期限ヲ延フルコトヲ得ス

第四百十七條 當事者ノ一方又ハ双方カ條  
件ノ成就又ハ不成就ノ前ニ死亡シタルト  
キハ合意ノ効力ハ其相續人ニ對シテ働方又  
ハ受方ニテ存在ス但條件カ其性質ニ因リ  
又ハ當事者ノ意思ニ因リテ要約者又ハ諾  
約者ノ一身ノミニ附著シタルトキハ此限  
ニ在ラス

第四百十八條 條件カ如何様ニ成就スヘキ  
法典調查會

カ又如何ナル時ニ成就シ又ハ成就セスト  
有做ケルヘキカラ知ルエトハ當事者ノ明  
示又ハ默示ノ意思ニ從ヒテ之ヲ決ス其條  
件ノ一部ノ成就ヨリ生ス可キ効力ニ就テ  
モ亦同レ

第四百十九條 諾約シタル物カ諾約者ノ過  
失ナクシテ停止條件ノ成就前ニ其價額ノ  
全部又ハ其過半ノ喪失シタルトキハ合意  
ハ之ヲ成立セスト有做レ且孰レノ方ヨリ  
何等ノ要求ヲモ為スコトヲ得ス

之ニ反シテ解除條件ヲ以テ諾約シタルトキ  
ハ右同一ノ喪失ハ要約者ノ權利確定シテ  
其負擔ニ歸シ且何等ノ返還ヲモ要求スル

エトヲ得ス

前二項ノ場合ニ於テ喪失カ價額ノ半ヲ超ヘサルトキハ條件ノ成孰ハ合意ノ効カヲ生ス

第四百二十条 一分ノ喪失カ當事者ノ一方ノ責ニ歸ス可キトキハ他ノ一方ハ自己ノ選擇ヲ以テ或ハ損失ノ償金ト共ニ合意ノ履行ヲ請求シ或ハ損害ノ賠償ト共ニ合意ノ解除ヲ請求スルエトヲ得

又全部喪失ノ場合ニ於テハ損害ノ賠償ヲ請求スルエトヲ得

第四百二十五条 當事者ハ其權利ヲ停止條件ニ繋リ又ハ其訴權ク權利上若リハ恩惠

法典調査會

上ノ期限ノ為メニ阻止ヲ受クルト雖モ其間ニ於テ本法及ヒ民事訴訟法ノ規定ニ從ヒテ自己ノ權利ノ保存憂分ツ為スエトヲ得

第四百二十六条 賣買契約ニ於テ特ニ慣用スル随意ノ停止又ハ解除ノ條件ニ付テハ財産取得編第二十九条乃至第三十二条ノ規定ニ從フ

(高法)

第二百八十五条 契約上ノ義務ヲ將來ノ事  
件ノ不確定ナル發生又ハ不發生ニ繋ラレ  
ル場合ニ於テハ契約ハ其事件ノ發生也

ナルトキ又ハ發生レタルトキハ當然消滅ス

第二百八十六條 契約ニ加ヘタル未必條件

又ハ期限ハ此カ為メ利益ヲ受クヘキ者ノ明示ノ拋棄ニ因ルニ非サレハ無効ト為スコトヲ得ス

第三百十三條 或ル期間ノ經過中ニ履行ヲ

為ス契約ナルトキハ其履行ハ期間内何レノ取引日ニテモ之ヲ為シ又ハ之ヲ求ムルコトヲ得

第三百十四條 前条ノ場合ニ於テ疑ハレキ

トキハ期間ノ定ニ因リテ利益ヲ受クヘキ一方ク履行日ヲ擇ムコトヲ得通例此ノ如

法典調査會

キ一方ト肩做ス可キ者ハ商品ノ受取人又

金銭ニ罹ル債権ニ在テハ債務者トス

第三百十五條 期間ヲ超ヘタル場合ニ於テ

別ニ定ムル所アルニ非サレハ其新期間ハ舊期間ノ満了ヨリ起算ス

第三百十六條 契約其他ニ履行期日ノ定ナ

クレテ債務者其履行ヲ相當ノ期間ニ為ササルトキハ債権者ハ満期日ヲ定ムルコトヲ得

第五章 期間

(証據編)

第九十九条

年又ハ月ニ依リテ成就ス可キ

時如ハ曆ニ從ヒテ之ヲ算ス

日ニ依リテ成就ス可キ時效ハ午前零時ヨ

リ午後十二時マテヲ一日ト為シテ之ヲ算

ス

時效ノ進行ノ始マリタル日又ハ其中断若

クハ停止ノ後再ヒ進行ノ始マリタル日ハ

之ヲ算セス

最後ノ日ハ全ク経過スルコトヲ要ス

(商法)

第三百七条

満期日ハ日ヲ指シテ之ヲ定ム

(年又ハ期間ヲ設ケル之)

法典調査會

ルコトヲ得

第三百八条

期間ヲ定ムルニ日數ヲ以テシ

タルトキハ其期間ノ末日ヲ満期日ト看做

シ週數月數又ハ年數ヲ以テシタルトキハ

最後ノ週月又ハ年ニ於テ結約ノ日ニ應當

スル日ヲ満期日ト看做ス

第三百九条

日ヲ以テ定メタル期間ノ計算

ニ舟テハ結約ノ日ハ之ヲ算入セス

第三百十条

半月ハ月ノ期間ト看做ス

第三百十一条

満期日カ一般ノ休日ニ當ル

トキハ其翌日ヲ満期日ト看做ス

第三百十二条

特別ノ情況アルトキノ外ハ

履行地ニ於ケル慣習上ノ取引時間ヲ以テ

履行ニ付テ一日ノ時間ト看做ス  
第六章 時效

證據編

第八十九条 時效ハ時ノ效力ト法律ニ定メ

又其其他ノ條件トテ以テスル取得又ハ免

責ニ法律上ノ推定ナリ但動産ノ瞬間時效

ニ關スル第四百四十二条以下ノ規定ヲ妨

第九十条 正當ナル取得又ハ免責ノ推定ハ

完全ニシテ公ノ秩序ニ關スルモノトス此

推定ハ第九十六条及ヒ第四百六十一条ニ規

定ニタル如ク法律ノ定メタル場合及ヒ方

法ニ從フニ非カレハ反對ノ證據ヲ許サズ

法典調査會

第一章 總則

第二章 取得時效

第三章 消滅時效

第四章 時効ノ效力

第五章 時効ノ要件

第六章 時効ノ阻却

三〇







西一七七七九元  
三編一季一節  
三歌、編入し

コトヲ要ス

第百三條 債權者ハ其權利ヲ詐害シテ債務者ノ爲ニタル時、該ノ拋棄ニ對シテハ、該債權第三百四十條以下ニ定メタル條件及方法ニ從ヒ自己ノ名ヲ以テ之ヲ攻撃スルコトヲ得

法典調査會



中斷  
X  
中斷

芽二 勸解上、名受又ハ任意出席

芽三 執行文提示又ハ催告

芽四 差押

芽五 任意、追認

右、可讀又ハ追認ノ行為力時効ノ存否若クモ  
テ受クル者ノ權利ニ關シテ關係スルコト

ヲ受ス

芽百十條 請求ノ中斷ハ中斷ノ所存ク行ヒ  
ル者必ヒ其法律ノ存否ニ非サシハ其

効ヲ生セス

芽百十一條 亦訴ト附帯訴ト存訴トシテ  
又裁判上ノ請求ハ付随ク中斷又但受請求

ノ方式ニ於テ無効ナルトキ又ハ其種類ノ

法典調査會

裁判所ト之ヲ爲シテトキモ亦同シ

然レトモ右但書ノ場合ニ於テ中斷ハ初ノ

請求ヲ棄却セシ判決アリテ時ヨリ二分

月内ニ至リ合式ノ訴ヲ提起セザルニ於テ

ハ之ヲ不成立ト看做ス

芽百十二條 中斷ハ尤ノ場合ニ於テモ亦之

ヲ不成立ト看做ス

芽一 請求力其基本ニ於テ棄却セラシ

ヨルトキ

芽二 原告力取テ下ヲ爲シテヨルトキ

芽三 訴訟手續ノ民事訴訟法ニ違フコト

凡時間停止ニテ其効ト爲リヨルトキ  
芽百十三條 裁判上ノ請求ヨリ生ズル中斷

中斷ノ要件

ハ訴訟、提託ヨリ其判決ノ確定ト爲ルマ  
テ継續ス

第百十四條

勸解上ノ各段又ハ任意出席ニ  
因ル時効ノ中断ハ定ムル積成ハ勿論其反

對ノ積成ヨリモ生ス

各段ノ無効ハ方式ノ瑕疵ニ因ルモ管轄審

ニ因ルモ中断ヲ妨ケ又但初ノ各段ノ各段

ト爲リ且ヨリ一个月内ニ之ヲ合式ノ各

段ヲ爲スコトヲ要ス

合式ノ各段ハ上級審不認ノ場合ハ之ヲ終止

ノ關係ノ場合ニ於テ中断ハ丁度月内ニ裁

決上ノ積成ヲ爲サ、ルトキハ之ヲ不成立

ト看做ス

法典調査會

第百十五條

執行又提手ヨリ生スル中断ハ  
一个年内ニ是押ヲ爲サ、ルトキハ之ヲ不

成立ト看做ス

左ノ中断ハ方式ノ瑕疵ニ因リテ其提手ノ

積成ナルトキト采凡尚ホ成立ス但借先ヨ

リ生スル中断ノ爲メ下ニ定ムル條件ヲ

履行スルコトヲ要ス

第百十六條

義務履行ノ借先ハ義務ノ目的  
原因トシテ積積者ク明カニ指示シ且六個月

内ニ裁決上又ハ勸解上ノ積成ヲ爲シ且

トキニ非サレハ時効ヲ中断セズ

第百十七條

是押ヨリ生スル中断ハ其是押  
一手積力合式ニ擬抗マテ抵抗シタルニ非



第三卷  
民法ノ效力

?

別

第百二十條 債ノ所有者ノ權利ヲ追認シ且  
凡レ所有者ハ其所有者ノ其債權人ニ對シ  
新時効ヲ再ヒ始ルニ權利ヲ失ハズ然レト  
モ右所有者ハ最早其以前ノ善意ノ利益ヲ權  
利人ニ付トク時又

右ノ其所有者ノ債權ノ所有者ト爲リ且  
トキハ持主ニ向ヒ何人ニ對シテモ時効ノ  
利益ヲ失フ但財產稱有ルハ十五條ノ  
内ニ才三項ノ場合ノ適用ヲ妨ケズ

第百二十一條 追認ニ因リテ中絶シタル先  
取時効ハ即時至ク進行ス然レトモ其時効  
ハ最初短期ノモノナリトキト雖モ持主  
ニ向ヒテハ長期時効ノ期間ニ從フ

法典調查會

第百二十二條 時効ヲ中絶スル追認ハ自己  
ノ財産ヲ管理スル能力又ハ時効ノ權限ノ  
ト有ル可キ財産ヲ他人ノ名ニ管理スル  
権力ヲ有スル者ニ於テ之ヲ爲シ且トキ  
ハ有效ナリ

然レトモ婦女能力者又ハ委任者ノ利益ハ  
於テハ不効ノ取得時効ヲ中絶スル爲メ  
夫後見人又ハ代理人ノ爲メ且追認ハ不  
効ノ請求ニ承認スル一親父ハ特別ノ權  
力ナルニ非サレハ有效ナラズ

第百二十三條 時効ヲ中絶スル追認ノ所爲  
ハ月中爭ハルトキハ通常ノ權方法ヲ以テ  
之ヲ證スルコトヲ時

西九七四一段に於て、  
 各りてまじし他を、九七五  
 段に於て二段並に、  
 信三十八(守)に、  
 二二〇(連)三三二  
 二二三(連)三三二  
 五二(連)五二(連)二  
 五二(連)五二(連)二

別

第百二十四條 保隆連帯の不可な場合

於ては、刑罰關係人、對し人、追認其他ノ  
 方法、固ル、刑罰中断、效力ハ債權担保ノ  
 才二十七條、才六十一條、第百八十一條、才  
 八十九條、於て之ヲ規定ス

第百二十五條 権刑ノ行使ハ権刑上ノハ、且

妻上、確定若クハ不確定ノ期間ニ屬シ、又  
 ハ其存亡ヲ停止條件ニ繫ルトキハ、其期間  
 ノ滿了又ハ條件ノ成就ノ時ニ非サレハ、時  
 効ハ進行ヲ成メス

第百二十六條 時効ハ初權ノ人ニ權ニシテ

其成三層在リ、行使ハ初權ニ繫ルニシテ  
 對シテハ、其初權人ニ非サレハ、進行ヲ成メ  
 ス

法典調査會

第百二十七條 遺言ノハ、前記ノ合意ニ對シ

相續人、屬スル、詔除訴權ノハ、初權ノ時ニ  
 ハ、其遺言ノハ、合意ヲ相續人ニ對シテ、採用  
 シ、其相續人ヲ養フハ、權刑行使ノ是、權  
 トシテ、採用ナレバ、或ハハ、進行ヲ成メ  
 ス

第百二十八條 上ノ場合、於て時効ハ才ニ

所持者ニ對シテ停止セ、但所有權ノ取得  
 時効ノハ、相續ノ消滅時効ヲ中断セシト欲  
 スルハ、刑罰關係人ニ於テ自己ノ決定ノ權刑  
 ノ追認證書ヲ得シト、權刑ハ、才ニ對シ



他二章一七。

瑞一五二

爾三〇二五配

偶多向

第百三十三條  
相違行し傳也言免  
可旨無信也

身ニテ為シタル行為ノ銷除許權ノ時効停  
止ニ關シ財産編第五百四十五條及ヒ第五  
百四十六條ニ定メタルモノヲ妨ケス

第百三十四條 配偶者ノ一人ヨリ他ノ一人  
ニ對シテ行フ可キ權利ニ關シテハ婚姻中

ト雖モ時効ハ進行ス

然レトモ其効ハ最後ノ一ヶ年停止ス又一

ヶ年以上ノ時効ニ關シテハ其最後ノ羊期

間停止ス

第百四十四條ノ場合ニ於テハ動産回復ノ

時効ハ三ヶ月トス

第百三十五條 時効ハ財産ノ管理人ト其管

理ヲ受クル者トノ間ニ於テ其保存スルコ

法典調査會

トヲ任セラレタル權利ニ付テハ管理人ノ

為メニ停止ス

時効ハ管理人カ止ミレ以後ニ非サレハ更

ニ進行セス又第百四十四條ノ場合ニ於ケ

ル動産ノ時効ニ關シテハ三ヶ月ヲ以テス

ルニ非サレハ成就セス

第百三十六條 上ニ定メタル場合ニ於テ時

効ノ期間ノ満了スル時ニ當リ有権者カ交

通ノ塞カリタルニ因リ又ハ地方ノ裁判事

務ノ停止セラレタルニ因リテ其權利ノ効

用ヲ致サレメ又ハ時効ヲ中断スル為メ手

續ク為スコト能ハサリレ時ハ有権者其妨

碍ノ止ム後直チニ請求ヲ為スニ於テハ其

?





三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百

二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百

三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百

同

三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百

同

第四百四十四條 正權原且善意ニテ有體動産

物ノ占有ヲ取得スル者ハ即時ニ時効ノ利益ヲ得但第百三十四條及ヒ第百三十五條ニ記載シタルモノヲ妨ケス

此場合ニ於テ及對カ證セラレサルトキハ占有者ハ正權原且善意ニテ占有スルモノトノ推定ヲ受ケ

第四百四十五條 動産物ノ占有者カ正權原ヲ

有シ且善意ナル場合ニ於テモ其物カ所有者ノ盜取セラレタルモノ又ハ遺失シタルモノナルトキハ其所有者ハ盜難又ハ遺失ノ時ヨリ二ヶ年間ハ占有者ニ對シテ其物ノ回復ヲ請求スルコトヲ得但占有者カ其

法典調査會

物ヲ有償ニテ受ケタルトキハ其讓渡人ニ

對スル求償ヲ妨ケス

背信ニ因リテ隱匿シ又ハ詐欺ヲ以テ得タル物ニハ本條ヲ適用セヌシテ前條ノ規定ニ從フ

第四百四十六條 盜取セラレ又ハ遺失シタル

物ヲ競賣又ハ公ノ市場ニ於テ又ハ此類ノ物ノ商人若クハ古物商人ヨリ善意ニテ買受ケタル者アルトキハ所有者ハ其買受代價ヲ辨償スルニ非サレハ回復ヲ為スコトヲ得ス

此場合ニ於テハ右ノ代價ニ付キ所有者ハ賣主ニ對シ又賣主ハ讓渡人ニ對シテ求償

權ヲ有シ終ニ盜取者又ハ拾得者ニ溯ル  
第百四十七條 無記名債權證書ヲ盜取セラ  
レ又ハ遺失シタル場合ニ於テ其證書回復  
ノ期間及ヒ條件ハ特別ノ規則ヲ以テ之ヲ  
定ム

第百四十八條 上ノ場合ニ於テ回復者カ占  
有ノ無權原タリ又ハ惡意タルコトヲ證ス  
ルトキハ時效ハ三十个年ヲ経過スルニ非  
サレハ成説セズ

第百四十九條 上ノ規定ハ用方ニ因リテ不  
動産ト考リタル動産カ其附着シタル不動  
産ヨリ分離セラレタル場合ニ於テハ其動  
産ニ之ヲ適用ス

法典調査會

別

上ノ規定ハ財産編第十二條ニ從ヒ用方ニ  
因ル動産ニ之ヲ適用セズ但其物カ土地ヨ  
リ分離シタルトキハ此限ニ在ラス  
又上ノ規定ハ記名債權ニモ包括動産ニモ  
之ヲ適用セズ但此等ノ物ニ関スル時效ノ  
期間ハ第百三十八條以下ニ記載シタル區  
別ニ從ヒ不動産ニ関スルモノト同一ナリ  
第百五十條 義務ノ免責時效ハ債權者カ其  
權利ヲ行フコトヲ得ヘキ時ヨリ三十个年  
間之ヲ行ハサルニ因リテ成就ス但法律上  
別較短キ期間ヲ定メ又ハ債權ヲ時效ニ罹  
ラサルモノト定メタルトキハ此限ニ在ラ  
ス

第百五十一條

債務ノ元本カ年賦ニテ辦濟

ス可キモノタルトキハ利息ヲ包含スルト  
否トシ問ハス時效ハ各年賦ノ要求期ニ違

第百五十二條

債權カ無期又ハ終身ノ年金

權ナルトキト雖モ其時效ハ證書ノ日附ヨ  
リ三十ヶ年ヲ以テ成就ス

然レトモ右ノ日附ヨリ二十八ヶ年後ニ  
至リ債權者ハ債務者ニ對シ時效ヲ中断ス

ル為メ雙方ノ費用ヲ以テ其權利ノ追認證  
書ヲ得ント要スルコトヲ得

若シ債務者右ノ要求ヲ拒絶シ債權者裁判  
上自己ノ權利ヲ追認セシムル必要アルト

法典調査會

キハ其費用ハ全ク債務者ノ負擔タリ

第百五十三條

動産質又ハ不動産質ノ返還

ヲ得ル為メノ對人訴權ハ適法ナル方法ニ  
因リテ債務ノ消滅シタル後ニ非サレハ時

效ニ罹ラス

第百五十四條

人ノ身分ニ關スル訴權ハ法

律カ其行使ヲ特別ノ期間ニ繫ラシムル場  
合ニ非サレハ時效ニ罹ラス

第百五十五條

相続人又ハ包括權原ノ受遺

者若クハ受贈者ノ分限ヲシテ效用ヲ致サ  
シムル為メノ遺產請求ノ訴權ハ相続人又

ハ包括權原ノ受贈者若クハ受遺者ノ權原  
ニテ占有スル者ニ對シテハ相続ノ時ヨリ

別

法典調査會  
第三卷  
第三編  
第三卷  
第三編

法典調査會  
第三卷  
第三編  
第三卷  
第三編

三十个年ヲ經過スルニ非サレハ時効ニ罹  
ラス

第百五十六條 免責時効ハ左ニ揚クル諸件

ノ辨濟ノ訖確ニ對シテハ五个年トス

第一 明確ナル金額ノ填補又ハ遅延ノ

利息

第二 無期又ハ終身ノ年金權ノ年金

第三 養料又ハ恩給ノ一期ノ支拂金

第四 借家債又ハ借地債

第五 果實又ハ日用品ノ每期ノ給與額

第六 教師青頭手代使用人乳母其他ノ

雇人ノ謝金又ハ給料ニシテ一个年毎

ニ定メラレタルモノ

法典調査會

此他一般ニ一个年毎ニ又ハ更ニ短キ

時期ヲ以テ定メタル金額又ハ有價物

ニ係ル債務ニ付テモ亦同シ但其辨濟

ノ方法如何ニ拘ハラヌ且下ニ規定シ

タル場合ハ此限ニ在ラス

第百五十七條 時効ハ左ノ訖確ニ對シテハ

三个年トス

第一 醫師産婆藥劑者ノ治術世話及ヒ

誦劑ニ関スル其訖確

第二 前條第六號ニ指定シタル教師使

用人其他ノ者ノ謝金又ハ給料カ一个

年ヨリ短ク一个月ヨリ長キ時期ヲ以

テ定メラレタル場合ニ於テハ其訖確

第三 技師工匠、測量師、製圖師ノ經畫意

見及ヒ工事ニ関スル許權

第四 不動産ニ関スル築造、地均其他ノ

工作ニ付テノ讀負人ノ許權

第百五十八條

公證人、辯護士、執達吏、其他ノ

ノ其許權ニ對スル時效ハ二年トス

此場合ニ於テ時效ハ右各人ノ債權ヲ生セ

レノタル行為又ハ訴訟ノ終了後ニ非サレ

ハ進行ヲ始メス

然レトモ終了セサル事件ニ関シテハ右各

人ハ五年餘ニ遡ル行為ノ為メニ謝金ヲ

要求スルコトヲ得ス

法典調査會

此規定ハ右各人カ其職務ノ為メニ為レタ

ル立替金及ヒ支出金ニ之ヲ適用ス

第百五十九條

時效ハ左ノ許權ニ對シテハ

一年トス

第一 非商人ニ為レタル供給ニ関スル

日用品、衣服、其他動産物ノ卸賣商人又

ハハ賣商人ノ許權但商人又ハ工業人

ニ為レタル供給ト雖モ其者ノ商賣又

ハ工業ニ関セサル場合ニ於テハ亦同

第二

右ノ區別ヲ以テ注文者ノ材料又

ハ動産物ニ付キ仕事ヲ為ス居職ノ職

工又ハ製造人ノ許權

第三 生徒又ハ習業者ノ教育、衣食及ヒ止宿ノ代科ニ関スル校長塾主師匠又ハ親方ノ訴權

第百六十條 時效ハ左ノ訴權ニ對シテハ六個月トス

第一 第百五十六條第ニ號及ヒ第百五十七條第ニ號ニ指定シタル教師使用人其他ノ者ノ謝金又ハ給料カ一個月又ハ更ニ短キ時期ヲ以テ定メラレタル場合ニ於テハ其訴權

第二 旅店又ハ料理所ノ主人ヨリ供給シタル宿泊料、飲食料及ヒ消費物ニ関スル其訴權

法典調査會

第三 日雇月雇ノ職工又ハ労力者ノ給料及ヒ其仕事ニ際シ此等ノ者ノ若シタル些少ノ供給ニ関スル其訴權

第百六十一條 前五條ニ規定シタル時效ハ現實ニ辨濟セサリレコトヲ明白ニタル債務者之ヲ援用スルコトヲ得ス

第百六十二條 裁判所書記、辯護士ハ裁判ノ時ヨリ公證人ハ證書調製ノ時ヨリ執事吏ハ其職務執行ノ時ヨリ三年ノ後ハ其職務ノ事件ニ関シテ交付セラレタル書類ニ付キ責任ヲ免カレ其書類返還ノ證ヲ提出スル義務ヲ免除セラレ

第百六十三條 本章ニ規定シタル時效ハ當

？  
追平のり表

不西仙南子

西元九九(元は、追)

元元九九の時改元してはははは

31

37

事者ノ間ニ明確ナル計算書數額ヲ記載シ  
タル債務ノ追認書又ハ債務者ニ對スル判  
決書アルトキハ之ヲ適用スルコトヲ得ス  
此場合ニ於テハ時効ハ三十ヶ年トス  
第百六十四條 本法實施ノ當時ニ於テ進行  
中ナル時効ハ上ニ定メタル條件禁止中斷  
及ヒ停止ニ從フ

其期間ニ關シテハ舊時効カ新時効ヨリ一  
層長キ期間ヲ要スル場合ニ於テハ占有者  
又ハ債務者ハ本法實施ノ時ヨリ算シ舊  
時効ノ經過ヲ可キ殘期カ新時効ノ期間ヨ  
リ短キトキハ舊時効ヲ利スルコトヲ得  
新時効ヨリ一層短キ期間ノ舊時効ニ關シ  
テハ其期間ハ本法ニ定メタルモノニ等シ  
キ期間ニ違フル極之ヲ延長ス可シ

法典調査會

(商法)

第三百五十條

時効ハ履行ノ爲メ債務者ニ  
明示シテ爲シタル催告又ハ債權ノ取立若  
クハ擔保ノ爲メ債務者ニ對シテ爲シタル  
債權者ノ裁判上若クハ裁判外ノ行為又ハ  
書面上ノ支拂約束又ハ主タル物若クハ從  
タル物ニ關シ債務者ノ爲シタル一分ノ支  
拂ニ因リテ中斷ス

第三百五十一條

受取證ヲ記シ又ハ記セザ  
ル計算書ノ送付ノコトニテハ之ヲ催告ト看  
做スコトヲ得ス

第三百五十二條

満了シタル時効ノ効カハ  
主タル物及ビ後タル物ニ付テ、債權全ク  
消滅シ債權者ヨリ直接ニモ間接ニモ復々  
之ヲ主張スルコトヲ得サルニ在リ